



Member's Open Space

難しい言葉 (その1)

●美咲歯科医師会会員

雨田 実



むずかしい言葉のなかに「こまたのきれあがった女性」という表現がある。すらりと背が高く、おきゃんで小意気なさまを評した言葉らしいが、では小股が切れ上がったとはなにか、ということになるとどうもよくわからない。大言海によると「女の背のスラリと高さを云ふ」、言泉には「丈のすらりとして小意気なるさま(女にいふ)」とあるだけ。大日本国語辞典にいたっては項目もない。そのほか中辞典クラスを数種当たってみたが、新しい知識はなにも得られなかった。小股はもちろん股であろう。それが切れ上がったといえばミニスカートの当代ならいざしらず、江戸時代の女の服装で脚部の長短を推知するなど、機微すぎてどうにもわからないのである。

慶應大学教授(文学部)池田氏によると、パリ以来の仲間の会にモンパル会という会があり、鎌倉の福島繁太郎氏宅で開いた時、(作家の)小島政二郎氏もゲストとして見え、談笑のすえに小島氏が「長いものには巻かれろ」の長いものとは「何だろう」と言った数種の疑問が沢山でた。そのなかに「小股云々」もでたのですが、久米正雄、宮田重雄といった博識も誰一人解明出来ず大笑いでした。その時、久米氏は「歩く時蹴出しの処の切れ上がり」じゃないかと言い、誰かが「目尻の線の切れ上がり」と言ったことを憶えています。また当時の芝居を観ての閑談を雑誌「芸能」に奥野信太郎、戸板康二両氏の対談として連載していたもののなかに、花柳章太郎評の時、奥野氏が女形

の花柳を絶賛して、小またの切れ上がった女と評していました。戸板氏が「小また」って何だろうと質問すると、奥野氏は「小またの小は、小耳に挟む、小太り、小面憎い、などの小で意味はなく、足捌きの活々と敏捷……」という風に説明していましたとのことであり、池田氏ご自身の説として述べられているのは、小股云々にはいろいろな説があるが、要するに「小股が切れあがった女」ということばからくる印象を分解して説明している説にすぎないのが多い。

相撲に「小股すくい」という手があるそうであるが、動詞にして小またをすくうともいい、小またをとるともいう。この場合の小股、大股の違いは股の部分の名称ではなく、とり方の区別を大、小でいっているらしい。右手で相手の右股をすくう場合が小、反対に右手で相手の左股をとる場合が大である。この場合はおお股とはいうが、大股すくいとはいわないらしい。それから想像すると、小股すくいとはちょっと股をすくうこと。大股をとるとは大きくかかえるように股をとる、ということらしい。こういう接頭語はほかにもある。たとえば、小首を傾けるというこの小首は「小さい首」ではなく、首をちょっと傾けること。小耳にはさむ、小耳に聞いた、などというのもそれとちょっと耳にしたということであるが、同じ小でも小手の場合は、高手、小手とそれぞれ部分をいい現していて、高手は肩からひじまで、小手はひじから手首までをいっていることは、はっきりして

いる。小手投げという相撲の手は、手をとってちょいと投げるといような気分があるが、やはり相手の小手部分をとって投げる投げかただろう。小手に振るといいう言い方もある。

こんな例を並べてみると「こまたが切れ上がっている女」というのは、小股がどこかと考えることは無意味であって股がちょっと切れ上がっている女ということなのだろう。そして股がちょっと切れ上がっている女とは、たぶん足が長く胴がふつうの人に比べて短い、八頭身の女性ということだろう。つまり日本人特有の座高の高い、足の短い、アヒルのような感じでない女性のことをいう言葉だと思う。私は小股のこよりも「切れ上がっている状態」について言っているのではないかと、こだわったわけであるが、私の説のあいまいさは、自分自身でもはがゆく感じている。

小股云々にはほかにさまざまな解釈があるので紹介したい。随筆「大江戸の迷児」によると、元吉原の大まがきの老遣手婆さんからの伝聞として紹介された語源説では、もともと廓言葉から出たのであるという。吉原にはおいらん道中というものがある。高い下駄で八文字という歩き方で歩く、外八文字「内八文字は歩幅も小さく、しおらしく見える」に女らしさ・気品を失うことなく歩幅も大きく派手にしかも小気味よくキリリと踏むまでには相当な修練を経なければならず、鮮やかに外八文字の踏めるようになった太夫のことを、小股の切れ上がったと評するようになったのだ。これなら、修練による股関節あたりの変化ということも考えられるかも知れないともいえる。もっとも小股を「襟足」と解し、わざわざ図解まで添えて「襟足の切れ込みの深い美人」との説を強く述べている異色解釈もあるし、小股云々は「眼が切れ長で妖艶な女」というほどの意であり、小股は眼じりに疑いなしとの説もあるが、なるほど分かりよくて好都合ではあるが、さて小股を眼じり

とする根拠がどこにあるのか。これまた同種用例をもっと挙げていただかねば、もっともらしい説ではあるが、オイソレとすぐ納得はしかねる。

木村莊八氏の随筆「しばや、モード、粋」によると、女がソク（足を割らないでまっすぐ立つこと）で立つ場合に、内輪の足つきは、足が両方から付くが踵は双方離れる。この間にスキ間があいて「小股が切れ上がる」のであると僕は解釈する、とある。ちょっと意味のとりにくい点もあるが、股を素直に股としている点ではだいたい通説通りと見てよかろうか？

以上いくつか語源を述べたけれど、折口信夫先生に師事し慶應義塾大学部教授を勤め横綱審議会委員、NHK解説委員など、各種の役職を兼ねた池田弥三郎氏が、氏一流の石橋をたたいて渡るように至極健実な文体で小股云々についてことばからくる印象を分解して説明している説にすぎないのが多いとして、理路整然と多くの例を挙げて小股は実在しないと述べながらも、説のあいまいさを気にされながら文を閉じておられることが心に残る。

くどくど述べたけれど、いずれの説明もすべて「だろう解」であり、結局わからないということが分かった。この言葉は江戸末期の遊里言葉として生まれたことばであることは、ほぼ察しがつくという程度で議論の余地を残してしまった。我が国の国語辞書の編集方法において、諸外国からもその歴史的背景からも遊里文学は高く評価されていると思うので、辞書編集者に軟文学類からの徹底的用語蒐集をはじめてほしい。これをしないから一人合点の「だろう解」になったり、先行辞書の引き写しというだけのものになってしまう。次号を乞う、ご期待。